（別記様式第3-3号）

科　目　名	①　職務の理解	時間数	7.5時間
ねらい （到達目標）	研修に先立ち、これからの介護が目指すべき、その人の生活を支える「在宅におけるケア」等の実践について、介護職がどのような環境で、どのような形で、どのような仕事を行うのか、具体的なイメージを持って実感し、以降の研修に実践的に取り組めるようになる。		

指導の視点

1　研修課程全体（174時間）の構成と各研修科目（10科目）相互の関連性の全体像をあらかじめイメージできるようにし、学習内容を体系的に整理して知識を効率・効果的に学習できるような素地の形成を促す。

2　視聴覚教材等を工夫するとともに、必要に応じて見学を組み合わせるなど、介護職が働く現場や仕事の内容を、出来るかぎり具体的に理解させる。

内　　容	時間数	講師氏名
1　多様なサービスの理解	150分	宇梶　幸子
①介護保険サービス（居宅、施設）		
②介護保険外サービス		
2　介護職の仕事内容や働く現場の理解	150分	宇梶　幸子
①居宅、施設の多様な働く現場におけるそれぞれの仕事内容	150分	宇梶　幸子
②居宅、施設の実際のサービス提供現場の具体的イメージ （視聴覚教材の活用、現場職員の体験談、サービス事業所における受講者の選択による実習・見学等）		
③ケアプランの位置付けに始まるサービスの提供に至るまでの一連の業務の流れとチームアプローチ・多職種、介護保険外サービスを含めた地域の社会資源との連携		

（別記様式第3-3号）

科　目　名	②　介護における尊厳の保持･自立支援	時間数	10時間
ねらい （到達目標）	介護職が、利用者の尊厳のある暮らしを支える専門職であることを自覚し、自立支援、介護予防という介護･福祉サービスを提供するにあたっての基本的視点及びやってはいけない行動例を理解している。		
修了時の 評価ポイント	1　介護の目的や展開について、尊厳の保持、QOL、ノーマライゼーション、自立支援の考え方を取り入れて概説できる。 2　虐待の定義、身体的拘束、およびサービスの利用者の尊厳、プライバシーを傷つける介護についての基本的なポイントを列挙できる。		

指導の視点

1　具体的な事例を複数示し、利用者およびその家族の要望にそのまま応えることと、自立支援･介護予防という考え方に基づいたケアを行うことの違い、自立という概念に対する気づきを促す。

2　具体的な事例を複数示し、利用者の残存機能を効果的に活用しながら自立支援や重度化の防止･遅延化に資するケアへの理解を促す。

3　利用者の尊厳を著しく傷つける言動とその理由について考えさせ、尊厳という概念に対する気づきを促す。

4　虐待を受けている高齢者への対応方法についての指導を行い、高齢者虐待に対する理解を促す。

内　　容	時間数	講師氏名
1　人権と尊厳を支える介護 （1）　人権と尊厳の保持 ①　個人としての尊厳　②　アドボカシー　③　エンパワメントの視点　④「役割」の実感 ⑤　尊厳のある暮らし　⑥　利用者のプライバシーの保護 （2）　ICF ①　介護分野におけるICF （3）　QOL ①　QOLの考え方　②　生活の質 （4）　ノーマライゼーション ①ノーマライゼーションの考え方 （5）　虐待防止･身体拘束禁止 ①　身体拘束禁止　②　高齢者虐待防止法　③　高齢者の養護者支援 （6）　個人の権利を守る制度の概要 ①　個人情報保護法　②　成年後見制度　③　日常生活自立支援事業	300分	平石　孝雄 岡本　尚樹 阿久津貴史
2　自立に向けた介護 （1）　自立支援 ①　自立･自律支援　②　残存能力の活用　③　動機と要求　④　意欲を高める支援 ⑤　個別性/個別ケア　⑥　重度化防止 （2）　介護予防 ①　介護予防の考え方　②　介護予防運動	300分	平石　孝雄 岡本　尚樹 阿久津貴史

（別記様式第3-3号）

科　目　名	③　介護の基本	時間数	6時間
ねらい （到達目標）	1　介護職に求められる専門性と職業倫理の必要性に気ずき、職務におけるリスクとその対応策のうち重要なものを理解している。 2　介護を必要としている人の個別性を理解し、その人の生活を支えるという視点から支援を捉える事ができる。		
修了時の 評価ポイント	1　介護の目指す基本的なものは何かを概説でき、家族による介護と専門職による介護の違い、介護の専門性について列挙できる。 2　介護職として共通の基本的な役割とサービスごとの特性、医療･看護との連携の必要性について列挙できる。 3　介護職の職業倫理の重要性を理解し、介護職が利用者や家族等と関わる際の留意点について、ポイントを列挙できる。 4　生活支援の場で出会う典型的な事故や感染、介護における主要なリスクを列挙できる。 5　介護職におこりやすい健康障害や受けやすいストレス、またそれらに対する健康管理、ストレスマネジメントのあり方、留意点等を列挙できる。		

指導の視点

1　可能な限り具体例を示す等の工夫を行い、介護職に求められる専門性に対する理解を促す。
2　介護におけるリスクに気づき、緊急対応の重要性を理解するとともに、場合によってはそれに一人で対応しようとせず、サービス提供責任者や医療職と連携することが重要であると実感できるよう促す。

内　　容	時間数	講師氏名
1　介護職の役割、専門性と多職種との連携 （1）　介護環境の特徴の理解 ①　訪問介護と施設介護サービスの違い　②　地域包括ケアの方向性 （2）　介護の専門性 ①重度化防止･遅延化の視点　②利用者主体の支援姿勢　③自立した生活を支えるための援助　④根拠のある介護　⑤チームケアの重要性　⑥事業所内のチーム ⑦多職種から成るチーム （3）　介護に関わる職種 ①　異なる専門性を持つ多職種の理解　②介護支援専門員　③サービス提供責任者 ④　看護師等とチームとなり利用者を支える意味　⑤互いの専門職能力を活用した効果的なサービスの提供　⑥　チームケアにおける役割分担	150分	平石　孝雄 岡本　尚樹 阿久津貴史
2　介護職の職業倫理 職業倫理 ①　専門職の倫理の意義　②　介護の倫理（介護福祉士の倫理と介護福祉士制度） ③　介護職としての社会的責任　④　プライバシーの保護･尊重 3　介護における安全の確保とリスクマネージメント （1）　介護における安全の確保 ①　事故に結びつく要因を探り対応していく技術　②　リスクとハザード （2）　事故予防、安全対策 ①リスクマネジメント　②分析の手法と視点　③事故に至った経緯の報告（家族への報告、市町村への報告等）　④情報の共有 知識	150分	平石　孝雄 岡本　尚樹 阿久津貴史
4　介護職の安全 介護職の心身の健康管理 ①　介護職の健康管理が介護の質に影響　②　ストレスマネジメント　③　腰痛の予防に関する知識 ④　手洗い･うがいの励行　⑤　手洗いの基本　⑥　感染症対策	60分	平石　孝雄 岡本　尚樹 阿久津貴史

（別記様式第3-3号）

科　目　名	④　介護･福祉サービスの理解と医療との連携	時間数	9，5時間
ねらい （到達目標）	介護保険制度や障害者総合支援制度を担う一員として最低限知っておくべき制度の目的、サービス利用の流れ、各専門職の役割･債務について、その概要のポイントを列挙できる。		
修了時の 評価ポイント	1　生活全体の支援のなかで介護保険制度の位置づけを理解し、各サービスや地域支援の役割について列挙できる。 2　介護保険制度や障害者総合支援制度の理念、介護保険制度の財源構成と保険料負担の大枠について列挙できる。 例：税が財源の半分であること、利用者負担割合 3　ケアマネジメントの意義について概説でき、代表的なサービスの種類と内容、利用の流れについて列挙できる。 4　高齢障害者の生活を支えるための基本的な考え方を理解し、代表的な障害者福祉サービス、権利擁護や成年後見制度の目的、内容について列挙できる。 5　医行為の考え方、一定の要件のもとに介護福祉士等が行う医行為などについて列挙できる。		

指導の視点

1　介護保険制度･障害者総合支援制度を担う一員として、介護保険制度の理念に対する理解を徹底する。

2　利用者の生活を中心に考えるという視点を共有し、その生活を支援するための介護保険制度、障害者総合支援制度、その他制度のサービスの位置づけや、代表的なサービスの理解を促す。

内　　容	時間数	講師氏名
1　介護保険制度	120分	平石　孝雄
（1）　介護保険制度創設の背景及び目的、動向		岡本　尚樹
①ケアマネジメント　②予防重視型システムへの転換		阿久津貴史
③地域包括支援センターの設置　④　地域包括ケアシステムの推進		
（2）　仕組みの基礎的理解		
①保険制度としての基本的仕組み　②介護給付と種類　③予防給付		
④要介護認定の手順		
（3）　制度を支える財源、組織･団体の機能と役割		
①　財政負担　②　指定介護サービス事業者の指定		
2　医療との連携とリハビリテーション	300分	平石　孝雄
①医行為と介護　②訪問介護　③施設における看護と介護の役割･連携		岡本　尚樹
④リハビリテーションの理念		阿久津貴史
3　障害者総合支援制度およびその他制度	150分	若井　公美
（1）　障害者福祉制度の理念		高橋　良
①障害の概念　②　ICF（国際生活機能分類）		
（2）　障害者総合支援制度の仕組みの基礎的理解		
①介護給付･訓練等給付の申請から支給決定まで		
（3）　個人の権利を守る制度の概要		
①　個人情報保護法　②　成年後見制度　③　日常生活自立支援事業		

（別記様式第3-3号）

科　目　名	⑤　介護におけるコミュケーション技術	時間数	7.5時間
ねらい （到達目標）	高齢者や障害者のコミュニケーション能力は一人ひとり異なることと、その違いを認識してコミュニケーションを取ることが専門職に求められていることを認識し、初任者として最低限の取るべき（取るべきでない）行動例を理解している。		
修了時の 評価ポイント	1　共感、受容、傾聴的態度、気づきなど、基本的なコミュニケーション上のポイントについて列挙できる。 2　家族が抱きやすい心理や葛藤の存在と介護における相談援助技術の重要性を理解し、介護職として持つべき視点を列挙できる。 3　言語、視覚、聴覚障害者とのコミュニケーション上の留意点について列挙できる。 4　記録の機能と重要性に気づき、主要なポイントを列挙できる。		

指導の視点

1　利用者の心理や利用者との人間関係を著しく傷つけるコミュニケーションとその理由について考えさせ、相手の心身機能に合わせた配慮が必要であることへの気づきを促す。

2　チームケアにおける専門職間でのコミュニケーションの有効性、重要性を理解するとともに、記録等を作成する介護職一人ひとりの理解が必要であることへの気づきを促す。

内　　容	時間数	講師氏名
1　介護におけるコミュニケーション （1）　介護におけるコミュニケーションの意義、目的、役割 ①　相手のコミュニケーション能力に対する理解や配慮　②　傾聴　③　共感の応答 （2）　コミュニケーションの技法、道具を用いた言語的コミュニケーション ①　言語的コミュニケーションの特徴　②　非言語コミュニケーションの特徴 （3）　利用者・家族とのコミュニケーションの実際 ①　利用者の思いを把握する　②　意欲低下の要因を考える　③　利用者の感情に共感する ④　家族の心理的理解　⑤　家族へのいたわりと励まし　⑥信頼関係の形成 ⑦　自分の価値観で家族の意向を判断し非難することがないようにする ⑧　アセスメントの手法とニーズとデマンドの違い （4）　利用者の状況・状態に応じたコミュニケーション技術の実際 ①　視力・聴力の障害に応じたコミュニケーション技術 ②　失語症に応じたコミュニケ-ション技術　③　構音障害に応じたコミュニケーション技術 ④　認知症に応じたコミュニケーション技術	300分	森川　澄子
2　介護におけるチームのコミュニケーション （1）　記録における情報の共有化 ①　介護における記録の意義・目的、利用者の状態を踏まえた観察と記録 ②　介護に関する記録の種類　③　個別援助計画書（訪問・通所・入所、福祉用具貸与等）　④　ヒヤリハット報告書　⑤　5W1H （2）　報告 ①　報告の留意点　②　連絡の留意点　③　相談の留意点 （3）　コミュニケーションを促す環境 ①　会議　②　情報共有の場　③　役割認識の場（利用者と頻回に接触する介護	150分	森川　澄子

（別記様式第3-3号）

科　目　名	⑥　老化の理解	時間数	6時間
ねらい （到達目標）	加齢･老化に伴う心身の変化や疾病について、生理的な側面から理解することの重要性に気づき、 自らが継続的に学習すべき事項を理解している。		
修了時の 評価ポイント	1　加齢･老化に伴う生理的な変化や心身の変化･特徴、社会面、身体面、精神面、知的能力面などの変化に 着目した心理的特徴について列挙できる。 例：退職による社会的立場の喪失感、運動機能の低下による無力感や羞恥心、感覚機能の低下によるストレス や疎外感、知的機能の低下による意欲の低下等 2　高齢者に多い疾病の種類と、その症状や特徴及び治療･生活上の留意点及び高齢者の疾病による症状や 訴えについて列挙できる。 例：脳梗塞の場合、突発的に症状が起こり、急速に意識障害、片麻痺、半側感覚障害等を生じる等		
指導の視点			
高齢者に多い心身の変化、疾病等について具体例を挙げ、その対応における留意点を説明し、介護において 生理的側面の知識を身に付けることの必要性への気づきを促す。			

内　　容	時間数	講師氏名
1　老化に伴うこころとからだの変化と日常	150分	阿久津　貴史
（1）　老年期の発達と老化に伴う心身の変化の特徴		平石　孝雄
①　防衛反応(反射)の変化　②　喪失体験		岡本　尚樹
（2）　老化に伴う心身の機能の変化と日常生活への影響		高橋　良
①　身体的機能の変化と日常生活への影響　②　咀嚼機能の低下　③　筋･骨･関節の変化		
④体温維持機能の変化　⑤　精神的機能の変化と日常生活への影響		
2　高齢者と健康	210分	若井　公美
（1）　高齢者の疾病と生活上の留意点		
①　骨折　②　能力の低下と働き･姿勢の変化　③　関節痛		
（2）　高齢者に多い病気とその日常生活上の留意点		
①　循環器障害(脳梗塞、脳出血、虚血性心疾患)　②　循環器障害の危険因子と対策		
③　老年期うつ病症状(強い不安感、焦燥感を背景に、「訴え」の多さが全面に出る、		
うつ病性仮性認知症)　④　誤嚥性肺炎　⑤　病状の小さな変化に気づく視点		
⑥　高齢者は感染症にかかりやすい		

（別記様式第3-3号）

科　目　名	⑦　認知症の理解	時間数	6時間
ねらい （到達目標）	介護において認知症を理解することの重要性に気づき、認知症の利用者を介護する時の判断の基準となる原則を理解している。		
修了時の 評価ポイント	1　認知症ケアの理念や利用者中心というケアの考え方について概説できる。 2　健康な高齢者の「物忘れ」と、認知症による記憶障害の違いについて列挙できる。 3　認知症の中核症状と行動・心理症状（BPSD）等の基本的特性、およびそれに影響する要因を列挙できる。 4　認知症の心理・行動のポイント、認知症の利用者への対応、コミュニケーションのとり方、および介護の原則について列挙できる。また、同様に、若年性認知症の特徴についても列挙できる。 5　認知症の利用者の健康管理の重要性と留意点、廃用症候群予防について概説できる。 6　認知症の利用者の生活環境の意義やそのあり方について、主要なキーワードを列挙できる。 例：生活習慣や生活様式の継続、なじみの人間関係やなじみの空間、プライバシーの確保と団らんの場の確保等、地域を含めて生活環境とすること。 7　認知症の利用者とのコミュニケーション（言語、非言語）の原則、ポイントについて理解でき、具体的な関わり方（良い関わり方、悪い関わり方）を概説できる。 8　家族の気持ちや、家族が受けやすいストレスについて列挙できる。		

指導の視点

1　認知症の利用者の心理・行動の実際を示す等により、認知症の利用者の心理・行動を実感できるよう工夫し、介護において認知症を理解することの必要性への気づきを促す。

2　複数の具体的なケースを示し、認知症の利用者の介護における原則についての理解を促す。

内　　容	時間数	講師氏名
1　認知症を取り巻く状況 認知症ケアの理念 ①　パーソンセンタードケア　②　認知症ケアの視点（できることに着目する）	100分	高橋　良
2　医学的側面から見た認知症の基礎と健康管理 認知症の概念、認知症の原因疾患とその病態、原因疾患別ケアのポイント、健康管理 ①　認知症の定義　②　もの忘れとの違い　③　せん妄の症状　④　健康管理（脱水・便秘・低栄養・低運動の防止・口腔ケア）　⑤　治療　⑥　薬物療法　⑥　認知症に使用される薬		
3　認知症に伴うこころとからだの変化と日常生活 （1）　認知症の人の生活障害、心理・行動の特徴 ①　認知症の中核症状　②　認知症の行動・心理症状（BPSD） ③　不適切なケア　④　生活環境で改善 （2）　認知症の利用者への対応 ①　本人の気持ちを推察する　②　プライドを傷つけない　③　相手の世界に合わせる ④　失敗しないような状況をつくる　⑤　すべての援助行為がコミュニケーションであると考えること　⑥　身体を通したコミュニケーション　⑦　相手の様子・表情・視線・姿勢などから気持ちを洞察する　⑧　認知症の進行に合わせたケア	160分	高橋　良
4　家族への支援 ①　認知症の受容過程での援助　②　介護負担の軽減（レスパイトケア）	100分	高橋　良

（別記様式第3-3号）

科　目　名	⑧　障害の理解	時間数	3，3時間
ねらい（到達目標）	障害の概念とICF、障害者福祉の基本的な考え方について理解し、介護における基本的な考え方について理解している。		
修了時の評価ポイント	1　障害の概念とICFについて概説でき、各障害の内容・特徴及び障害に応じた社会支援の考え方について列挙できる。 2　障害の受容のプロセスと基本的な介護の考え方について列挙できる。		

指導の視点

1　介護において障害の概念とICFを理解しておくことの必要性の理解を促す。

2　高齢者の介護との違いを念頭におきながら、それぞれの障害の特性と介護上の留意点に対する理解を促す。

内　　容	時間数	講師氏名
1　障害の基礎的理解	50分	高橋　良
（1）　障害の概念とICF		
①　ICFの分類と医学的分類　②　ICFの考え方		
（2）　障害者福祉の基本理念		
①　ノーマライゼーションの概念		
2　障害の医学的側面、生活障害、心理・行動の特徴、かかわり支援等の基礎的知識	150分	若井　公美
（1）　身体障害		
①　視覚障害　②　聴覚・平衡障害　③　音声・言語・咀嚼障害		
④　肢体不自由　⑤　内部障害		
（2）　知的障害		
①　知的障害		
（3）　精神障害（高次脳機能障害・発達障害を含む）		
①　統合失調症・気分（感情障害）・依存症などの精神疾患　②　高次脳機能障害		
③　広汎性発達障害・学習障害・注意欠陥多動性障害などの発達障害		
（4）　その他の心身の機能障害		
3　家族の心理・かかわり支援の理解		若井　公美
家族への支援		
①　障害の理解・障害の受容支援　②　介護負担の軽減		

（別記様式第3-3号）

科　目　名	⑨　こころとからだのしくみと生活支援技術	時間数	75時間
ねらい （到達目標）	1　介護技術の根拠となる人体の構造や機能に関する知識を習得し、安全な介護サービスの提供方法等を理解し、基礎的な一部または全介助等の介護が実施できる。 2　尊厳を保持し、その人の自立及び自律を尊重し、持てる力を発揮してもらいながらその人の在宅・地域等での生活を支える介護技術や知識を習得する。		
修了時の 評価ポイント	1　主だった状態像の高齢者の生活の様子をイメージでき、要介護度等に応じた在宅・施設等それぞれの場面における高齢者の生活について列挙できる。 2　要介護度や健康状態の変化に沿った基本的な介護技術の原則（方法・留意点、その根拠等）について概説でき、生活の中の介護予防、および介護予防プログラムによる機能低下の予防の考え方や方法を列挙できる。 3　利用者の身体の状況に合わせた介護、環境整備についてポイントを列挙できる。 4　人の記憶の構造や意欲等を支援と結び付けて概説できる。 5　人体の構造や機能が列挙でき、何故行動が起こるのかを概説できる。 6　家事援助の機能と基本原則について列挙できる。 7　装うことや整容の意義について解説でき、指示や根拠に基づいて部分的な介護を行うことができる。 8　体位変換と移動・移乗の意味と関連する用具・機器やさまざまな車いす、杖などの基本的使用方法を概説でき、体位変換と移動・移乗に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。 9　食事の意味と食事を取り巻く環境整備の方法が列挙でき食事に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行う事ができる。 10　入浴や清潔の意味と入浴を取り巻く環境整備や入浴に関連した用具を列挙でき、入浴に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。 11　排泄の意味と排泄を取り巻く環境整備や関連した用具を列挙でき、排泄に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。 12　睡眠の意味と睡眠を取り巻く環境整備や関連した用具を列挙でき、睡眠に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。 13　ターミナルケアの考え方、対応の仕方・留意点、本人・家族への説明と了解、介護職の役割や他の職種との連携（ボランティアを含む）について、列挙できる。		

指導の指針
1　介護実践に必要なこころとからだのしくみの基礎的な知識を介護の流れを示しながら、視聴覚教材や模型を使って理解させ、具体的な身体の各部の名称や機能等が列挙できるように促す。 2　サービスの提供例の紹介等を活用し、利用者にとっての生活の充足を提供しかつ不満足を感じさせない技術が必要となることへの理解を促す。 3　例えば「食事の介護技術」は「食事という生活の支援」と捉え、その生活を支える技術の根拠を身近に理解できるように促す。さらに、その利用者が満足する食事が提供したいと思う意欲を引き出す。他の生活面でも同様とする。 4　「死」に向かう生の充実と尊厳ある死について考えることができるように、身近な素材からの気づきを促す。

内　　容（考えられる展開例）	時間数	講師氏名
＜展開例＞ 基本知識の学習の後に、生活支援技術等の学習を行い、最後に事例に基づく総合的な演習を行う。 概ね次のような展開が考えられる。		

内　　容（考えられる展開例）	時間数	講師氏名
［基本知識の学習（5時間程度］		
1　介護の基本的な考え方 ①理論に基づく介護（ICFの視点に基づく生活支援、我流介護の排除）②法的根拠に基づく介護	150分	宇梶　幸子
2　介護に関するこころのしくみの基礎的理解 ①学習と記憶の基礎知識②感情と意欲の基礎知識③自己概念と生きがい④老化や障害を受け入れる適応行動とその阻害要因⑤こころの持ち方が行動に与える影響⑥からだの状態がこころに与える影響		
3　介護に関するからだのしくみの基礎的理解 ①人体の各部の名称と動きに関する基礎知識　②骨・関節・筋に関する基礎知識、ボディメカニクスの活用　③中枢神経系と体性神経に関する基礎知識　④自律神経と内部器官に関する基礎知識　⑤こころとからだを一体的に捉える ⑥利用者の様子の普段との違いに気づく視点	150分	宇梶　幸子
［生活支援技術の講義・演習・実習（60時間程度）］		
4　生活と家事 家事と生活の理解、家事援助に関する基礎的知識と生活支援 ①生活歴②自立支援③予防的な対応④主体性・能動性を引き出す⑤多様な生活習慣 ⑥価値観	500分 （うち250分演習）	宇梶　幸子
5　快適な居住環境整備と介護 快適な居住環境に関する基礎知識、高齢者・障害者特有の居住環境整備と福祉用具に関する留意点と支援方法 ①家庭内に多い事故　②バリアフリー　③住宅改修　④福祉用具貸与	150分	宇梶　幸子
6　整容に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護 整容に関する基礎知識、整容の支援技術 ①身体状況に合わせた衣類の選択、着脱　②身じたく　③整容行動　④洗面の意義・効果	350分 （うち180分演習）	宇梶　幸子
7　移動・移乗に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護 移動・移乗に関する基礎知識、さまざまな移動・移乗に関する用具とその活用方法、利用者、介助者にとって負担の少ない移動・移乗を阻害するこころとからだの要因の理解と支援方法、移動と社会参加の留意点と支援 ①利用者と介護者の双方が安全で安楽な方法　②利用者の自然な動きの活用　③残存能力の活用・自立支援　④重心・重力の働きの理解　⑤ボディメカニクスの基本原理　⑥移乗介助の具体的な方法（車いすへの移乗の具体的な方法、全面介助でのベッド・車いす間の移乗・全面介助での車いす・洋式トイレ間の移乗）　⑦移動介助（車いす・歩行器・つえ等） ⑧褥瘡予防	350分 （うち180分演習）	宇梶　幸子
8　食事に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護 食事に関する基礎知識、食事環境の整備・食事に関連した用具・食器の活用方法と食事形態のからだのしくみ、楽しい食事を阻害するこころとからだの要因の理解と支援方法、食事と社会参加の留意点と支援 ①食事をする意味　②食事のケアに対する介護者の意識　③低栄養の弊害　④脱水の弊害 ⑤食事と姿勢　⑥咀嚼・嚥下のメカニズム　⑦空腹感　⑧満腹感　⑨好み　⑩食事の環境整備（時間・場所等）　⑪食事に関した福祉用具と介助方法　⑫口腔ケアの定義 ⑬誤嚥性肺炎の予防	350分 （うち180分演習）	宇梶　幸子

内　　容（考えられる展開例）	時間数	講師氏名
9　入浴、清潔保持に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護 入浴、清潔保持に関連した基礎知識、さまざまな入浴用具と整容用具の活用方法、 楽しい入浴を阻害するこころとからだの要因の理解と支援方法 ①羞恥心や遠慮への配慮　②体調の確認　③全身清拭（身体状況の確認、室内環境の調整、 使用物品の準備と使用方法、全身の拭き方、身体の支え方）　④目・鼻腔・耳・爪 の清潔方法　⑤陰部清拭（臥床症状での方法）　⑥足浴・手浴・洗髪	350分 （うち180分 演習）	宇梶　幸子
10　排泄に関連したこころとからだのしくみとと自立に向けた介護 排泄に関する基礎知識、さまざまな排泄環境整備と排泄用具の活用方法爽快な排泄 を阻害するこころとからだの要因の理解と支援方法 ①排泄とは　②身体面（生理面）での意味　③心理面での意味　④社会的な意味⑤プライド・ 羞恥心　⑥プライバシーの確保　⑦おむつは最後の手段/おむつ使用の弊害　⑧排泄障害が 日常生活上に及ぼす影響　⑨排泄ケアを受けることで生じる心理的な負担・尊厳や生きる 意欲との関連　⑩一部介助を要する利用者のﾄｲﾚ介助の具体的方法⑪便秘の予防（水分 の摂取量保持、食事内容の工夫/繊維質の食物を多く取り入れる（腹部マッサージ）	350分 （うち180分 演習）	宇梶　幸子
11　睡眠に関したこころとからだのしくみと自立に向けた介護 睡眠に関する基礎知識、さまざまな睡眠環境と用具の活用方法、快い睡眠を阻害する こころとからだの要因の理解と支援方法 ①安眠のための介護の工夫　②環境の整備（温度や湿度、光、音、よく眠るための寝室） ③安楽な姿勢・褥瘡予防	180分	宇梶　幸子
12　死にゆく人に関連したこころとからだのしくみと終末期介護 終末期に関する基礎知識とこころとからだのしくみ、生から死への過程、「死」に向き合う こころの理解、苦痛の少ない死への支援 ①終末期ケアとは　②高齢者の死に至る過程（高齢者の自然死（老衰）、癌死）　③臨終 が近づいた時の兆候と介護　④介護従事者の基本的態度　⑤多職種間の情報共有の 必要性	180分	宇梶　幸子
※「実習」について 施設サービス実習と訪問通所サービス実習をそれぞれ6時間実施する。 「実習の目的」 ・介護サービス施設、事業所における介護職員の役割や業務の実際を理解する。 ・施設や在宅における利用者の生活を知ることで、利用者、家族についての理解 を深める。 ※「生活支援技術の講義・演習・実習」においては、総時間の概ね5～6割を技術演習 に充てることとし、その他の時間は、個々の技術に関連したこころとからだのしくみ等の 根拠の学習及び技術について講義等に充てること。	800分	実習

内　　容（考えられる展開例）	時間数	講師氏名
［生活支援技術演習（10時間程度）］		
13　介護過程の基礎的理解	200分	宇梶　幸子
①介護過程の目的･意義･展開　②介護過程とチームアプローチ	（うち100分演習）	
14　総合生活支援技術演習	500分	宇梶　幸子
（事例による展開）	（演習）	
生活の各場面での介護について、ある状態像の利用者を想定し、一連の生活支援を提供する流れの理解と技術の習得、利用者の心身の状況にあわせた介護を提供する視点の習得を目指す。		
①事例の提示→こころとからだの力が発揮できない要因の分析→適切な介護技術検討→支援技術演習→支援技術の課題（1事例1.5時間程度で上のサイクルを実施する）		
②事例は高齢（要支援2程度、認知症、片麻痺、座位保持不可）から2事例を選択して実施		
※本科目の6～11の内容についても、「14　総合生活支援技術演習」で選択する高齢の2事例と同じ事例を共通して用い、その支援技術を適用する考え方の理解と技術の習得を促す。		
※本科目の6～11の内容における各技術の演習及び「14　総合生活支援技術演習」においては、一連の演習を通して受講者の技術度合いの評価（介護技術を適用する各手順のチェックリスト形式による確認等）を行うことが望ましい。		

（別記様式第3-3号）

科　目　名	⑩　振り返り	時間数	5時間
ねらい （到達目標）	研修全体を振り返り、本研修を通じて学んだことについて再認識を行うとともに、就業後も継続して学習・研鑽する姿勢の形成、学習課題の認識をはかる。		

指導の指針

1　在宅、施設の何れの場合であっても、「利用者の生活の拠点に共に居る」という意識を持って、その状態における模擬演習（身だしなみ、言葉遣い、応対の態度等の礼節を含む。）を行い、業務における基本的態度の視点を持って介護を行えるよう理解を促す。

2　研修を通じて学んだこと、今後継続して学ぶべきことを演習等で受講者自身に表出・言語化させたうえで、利用者の生活を支援する根拠に基づく介護の要点について講義等により再認識を促す。

3　終了後も継続的に学習することを前提に、介護職が身につけるべき知識や技術の体系を再掲するなどして、受講者一人ひとりが今後何を継続的に学習すべきか理解できるよう促す。

4　最新知識の付与と、次のステップ（職場環境への早期適応等）へ向けての課題を受講者が認識できるよう促す。

5　介護職の仕事内容や働く現場、事業所等における研修の実例等について、具体的なイメージを持たせるような教材の工夫、活用が望ましい。（視聴覚教材、現場職員の体験談、サービス事業所における受講者の選択による実習・見学等）

内　　容	時間数	講師氏名
1　振り返り ①研修を通じて学んだこと②今後継続して学ぶべきこと③根拠に基づく介護についての要点 （利用者の状態像に応じた介護と介護過程、身体・心理・社会面を総合的に理解するための知識の重要性、チームアプローチの重要性等）	150分	宇梶　幸子
2　就職への備えと研修終了後における継続的な研修 ①継続的に学ぶこと②研修終了後における継続的な研修について、具体的にイメージできるような事業所等における事例（OFF.－JT,OJT）を紹介	150分	宇梶　幸子